Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】宋代語録における副詞の研究

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2009-12-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 竹田,治美, 野村,鮎子, 谷口,洋, 鈴木,広光
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1129

氏名（本籍）	竹田治美　（奈良県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博課第393号
学位授与年月日	平成20年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	宋代語録における副詞の研究
論文審査委員	（委員長）教授　野村鮎子　准教授　谷口　洋 准教授　鈴木広光

論文内容の要旨

本論文は「はじめに」「おわりに」を含む全6章の論考から成り、附録「五種語録副詞索引および用例集」と本論文以前に公刊された附論3篇を巻末に附す。

「はじめに」は、漢語史における宋代（時代区分では近古）副詞研究の意義を明らかにし、宋代語録に関する先行研究、およびそれを踏まえての問題提起、そして本論文で用いた研究方法をまとめたものである。漢語の中でも副詞と称される語群は、品詞体系に分類する上で、意味や状態、特徴によって分類方法が大きく異なり、学説も多岐にわたる。一方、語録をテキストとする言語研究は近年注目されており、その中でも禅宗語録の研究は刮目に価するが、宋学の語録を用いた研究ではほとんどが『朱子語類』もしくはその節略本である『朱子語類輯略』など、特定の文献のみを対象とするものである。このことから、宋代の言語の全体像を知るために、より範囲を広げた研究が必要であることを論じた。

第一章「宋代の言語と語録」では、宋代の漢語について、語音、語彙、語法の全体的な特徴をまとめ、語録の定義、起源、さらに宋代に儒者を中心に語録という文体が盛行した背景を考察している。語録は儒学や禅宗などの指導者が説き示した言葉を集めたものである。語録が書名として登場とするのは唐代だが、宋代になると一つのジャンルとして飛躍的に発展し、量的にも質的にも一つのピークを形成する。宋儒における語録盛行の要因としては、宋代の政治体制と科挙制度によって新興の知識層を中心とした士大夫文化が形成されたこと、また士大夫に儒学復興の気運が生まれ、宋学の形成を促したこと、宋学が禅宗の講学や問答形式の教授スタイルに影響を受けたことなどが指摘される。また、当時の語録の編纂情況を見るために『宋史芸文志』『直斎書録解題』『四庫提要』などをもとに

「宋代語録総目録」を作成、その佚存状況についても調査を行った。

第二章「著者とテキストについて」は、本論文が分析対象とする程顥・程頤『二程語録』、楊時『亀山語録』張載『張子語録』、謝良佐『上蔡先生語録』、朱熹『朱子語類』についての、テキスト研究にあたる。たとえば、一般に『二程語録』と総称されるものは、広義では『二程遺書』『二程外書』『二程粋言』を指すが、『外書』には『遺書』と重複する部分も多く、『粋言』は文体を文言に統一するなどの書き換えなどがあり、本論では『二程遺書』のみを分析対象とすることなどを論じる。また、五種の語録には、『亀山語録』や『張子語録』のように宋版が現存しているものもあり、資料的価値にも注目した。

第三章「宋代語録における副詞について」は、本論の中核となる部分である。本章では、五つの語録における副詞を機能と性質によって、程度副詞、範囲副詞、時間副詞、情態副詞、否定副詞、語気副詞の6つに分類し、逐一用例を挙げて考察を加えている。五つの語録に見える副詞の総計は432で、その内訳は程度副詞78、範囲副詞69、時間副詞102、情態副詞75、否定副詞19、語気副詞89である。全体的な傾向としては、語録に見える432の副詞のうち中古までの文献に見える副詞は300、近古に誕生したものは132となっており、近古に誕生した副詞の多くは複音節であることを指摘した。また、中古の副詞は、実詞の用法を存しながら副詞的な役割を果たすことがあったが、宋代語録にみえる近古に登場した複音節副詞は、副詞の機能しかもたないことについても論及している。さらに語録に多く見られる副詞の重複や呼応形式は宋代文学と口語表現の関わりの中で考察されるべきものとして論じた。

第四章「音節構造からみた宋代副詞」は、音節構造の視点から宋代の副詞の全体的な特徴を論じたものである。まず以前に発表した「『捜神記』の程度副詞について」をもとに、中古の副詞は、単音節副詞が主流であり、副詞の機能のみを担うものは少数で、複数の詞性をもつ多義語としての役割を果たしたものが大半を占めることなどを確認する。語録では、単音節副詞は191、全体の44%で半数以下となっており、中古からの顕著な変化がみられる。語録における複音節副詞は全部で241、そのうち近古に登場した副詞は合計132、その中、複音節副詞は86である。つまり近古に誕生した副詞の多くは複音節であることが分かる。またそのほとんどは一語一義であり、副詞としての機能に限定されたものが多いなどの特徴が指摘される。

「おわりに」は、本論文の各章で検討した事項およびその結果をまとめたものである。本研究で取り上げた五つの語録は合計175巻、総文字数は2,720,000字に及び、そのサンプル数の多さから、宋代副詞の全体の傾向を反映したものになっていると考えられる。

附録「五種宋代語録副詞索引及び用例集」は、本論文に取り上げた五種類の宋学語録における副詞を収めた索引及び用例集である。

附論3篇は、本論文に先立って発表された3本の論文である。うち「『捜神記』の程度副詞につい

て」は、宋代に先立つ中古漢語における副詞を論じている。残る2篇は、「朱子語類輯略』を言語的側面から論じており、本論文の出発点となったものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、宋代の語録における副詞を、用法、特徴、機能およびその歴史的変遷の面から考察したものである。分析テキストとして用いたのは、程顥・程頤の『二程語録』、楊時の『亀山語録』、張載の『張子語録』、謝良佐の『上蔡先生語録』、朱熹の『朱子語類』など、五種の所謂宋学（宋代儒学）語録である。

本論文が「はじめに」で指摘するように、これまで宋代語録の先行研究はすべて、『二程語録』や『朱子語類』またはその節略本である『朱子語類輯略』のいずれか一種のテキストに限ったものであり、しかも語録の副詞についての研究はほとんど皆無に近い状況にあった。

この論文の最大の特徴は、テキストを一つに限定せず、五種の語録を総体的にとらえ、宋代副詞の全体像を把握しようとしたところにある。五種の語録の合計は175巻、総文字数は2,720,000字に及ぶ。そのうち、『亀山語録』、『張子語録』、『上蔡先生語録』については、儒学思想の研究では用いられるが、これまでの語学研究では全く取り上げられることのなかった文献である。

論者はまず第一章で宋代の言語状況を概観し、語録というジャンルが宋代に盛行した背景について考察する。宋代の社会、文化については多くの研究蓄積があり、本章に特別目新しい論が展開されているわけではないが、宋代語録を分析対象とすることの意義を示しておくためにも必要不可欠な章である。論者はここで、宋代における語録の全体像を掴むため、各種の蔵書誌や書目から語録の書名と思われるものをリストアップし、その佚存状況の調査も行っており、これらは今後の語録研究に裨益するものである。

テキストをデーターベース化する際には、どの版本を使用するかが重要となるが、第三章は、五種の語録に関する基本情報とそれぞれの版本流伝、どのような理由でいずれの版本を底本としたかが述べられる。たとえば『亀山語録』は宋版が現存しており、宋の言語状況を分析するには第一級の資料であり、論者が採用した版本は、おおむね妥当なものとして首肯できる。ただ、標点本がないということは、解読の難易度が高くなることを意味する。とりわけ儒学の抽象概念を論じた文章は、難解を極め、句読点を打ちにくい箇所である。これに果敢に挑戦したことを評価したい。

第三章では、データーベース化した副詞を、機能と性質によって、程度副詞、範囲副詞、時間副詞、情態副詞、否定副詞、語気副詞の６つに分類し、総計432の全副詞について逐一典型的な用例をあげて説明している。ちなみにその内訳については程度副詞78、範囲副詞69、時間副詞102、情態副詞75、否定副詞19、語気副詞89という結果を得ている。本章では全体的な傾向として、語録に見える432の副詞のうち中古までの文献に見える副詞は300、近古に誕生したものは132あり、近古に誕生した副詞

の多くは複音節であることが指摘されている。個別にみれば、程度副詞では78のうち39、つまり50.0％が近古に誕生したものであり、以下、範囲副詞８（11.6％）、時間副詞27（26.5％）、情態副詞26（34.7％）、否定副詞８（42.1％）、語気副詞33（37.0％）という結果になっている。また、論者は、中古の副詞は実詞の用法を存しながら副詞の機能を果たすことがあったが、宋代語録の中の近古に登場した複音節副詞は、多くの場合副詞の機能しかもたないこと、一語一義であることを指摘する。いずれも実証的な本研究から帰納された結論である。ただ、近古に新たな副詞が生成するに至った事情、特に中古との比較では、論文中に中古の用例が乏しく、すべて附論の「『捜神記』における程度副詞について」に委ねられている点は残念であった。

第四章は、主に第三章の調査分析で判明した、宋代における副詞の複音節化について詳述している。五つの語録の副詞432の中で、単音節副詞は191、全体の44％となっている。一方の複音節副詞は242であることから、論者は近古において複音節副詞が徐々に主流をなす傾向にあることを指摘する。これは、楊栄祥が『近代漢語副詞研究』（2004）で紹介する、近古において単音節副詞の全体に占める比率は半分に満たないという調査結果とほぼ符合する。楊によれば『敦煌変文集』の単音節副詞は48.2％、宋代の資料『朱子語類』は47.1％、元代の資料『新編五代史平話』は65.3％、明代の資料『金瓶梅詞話』は42.8％であるという。論者の調査結果はほぼ妥当な数字であることがわかる。また、論者は、複音節語は口語表現の発達につれて生れたものだとするが、これについてはすでに先学の指摘するところであり、ここでは語録の文体と関連づけて論じてほしい点であった。また、『朱子語類』は中国南方閩の方言が入っている点について、今回は総体として語録の副詞をとらえようとしたため、他の四種の語録との相違を指摘できずに終わったこと、また、近古に誕生した単音節副詞の特徴について十分な考察が及ばなかった点もあるが、これらは斯界の語録研究の課題でもある。

附論の「『捜神記』における程度副詞について」（天理大学『中国文化研究』第23号2007年３月）、「『朱子語類輯略』における『得』について」（天理大学『中国文化研究』第24号2008年３月）、「『朱子語類輯略』における程度副詞について」（奈良女子大学大学院『人間文化研究科年報』第23号2008年３月）はいずれも本論文に先立って公刊された論文であるが、本論文はこれらの研究を基礎にしつつ、考察の範囲を格段に広げ、宋代言語の全体像に迫ったものと評価できる。

本論文には第四章にいささか論証が不十分な点は認められるものの、先行研究が乏しい中にあって、あえて一つの語録に絞らず、五つの語録を研究対象としたこと、また膨大な巻数の文献について版本を比較検討してテキストをデーターベース化したことの意義は大きい。以上の観点から、審査委員会では、本論文が奈良女子大学博士（文学）の学位を授与するに十分な内容を有していると判断した。